

1年生の「くっつき」の勉強

1学期、入門期のかな文字指導の中で、くりかえしくっつきについて子どもたちに教えてきました。単語（名詞）のおしりにはくっつきがつくのだと、しつこいくらい教えてきました。が、教えれば全部そのまま獲得できるかといえば、そうはいきません。2学期になって、文を書く機会を増やしてきましたが、くっつきが完全に正確に書けている子は多くはありませんでした。そればかりか、発音と表記がずれている長音、促音なども正確とはいえないのが実態です。

だからといって、精神主義的に訓練・練習で克服できるわけでもなさそうです。

子どもたちが、くっつきなどの表記がなかなか正確にできないこと理由は、練習不足以外にもいくつかあると感じています。

その一つは、まだ単語意識が弱いということです。くっつきは、単語意識がないと書けません。単語のおしりにくっつきがつくんだといっても、単語がつかめていなければ、くっつきを意識してつけることはできません。また、単語は、名詞ばかりではなく、動詞や形容詞もあります。くっつきのつかない単語も、普通に出てきます。単語のおしまいにはくっつきがつくのだとしか教えていませんから、子どもたちはわかったようなわからないような状態で、感覚的に覚えていくことになりま。言語に対する感性の鋭い子は、注意しなくても、「慣れ」によって習得していくようです。しかし、そうではない圧倒的多数の子は、混乱したまま進むことになりま。結果的には、多くの文を読み、多くの文を書くことで、「慣れ」させるのを待っているのが現状です。が、それでは、高学年になってもくっつきをまちがえるという現状を克服することはできないと思えます。

二つめは、子どもの言語生活の影響です。子どもたちの中にある言語は、1年生の時期では、かなり大きな差がみられるように思います。当然、語彙の数も、子どもによって違います。そうした中で、学校で使うことば、教科書の中のことばがわからない子もいます。ここで、わからないと言ってくれるといいのですが、指導者側としては、知っているものだと思いこんで進んでしまうことも少なからずあるようです。こうなると、単語意識以前の問題になります。

また、発音も、正確になされているとはいえません。子どもたちは、耳から言語の情報を集めてきていますから、聞いた感じ、自分の周りの大人たちがしゃべっている発音が、その言葉の発音となって使っています。ですから、かな文字を学習して、ことばを文字化していくときに、自分の発音してきたとおりを書きます。すると、「七」を「ひち」と書くような場面が多く現れます。これは、くっつきとは直接関係がありませんが、表記の間違いの原因として、大きくあるものです。文字に書くことで間違いがはっきりとわかるので、間違っただけで正しいことを知るといふことになりま。

三つめは、とりたてのくっつきも含めた、くっつき自身の問題です。「が・を・

阿波小学校
佐 楽 信 也

くっつきの勉強

に・へ・で・と・から・まで・の」という格助詞は、現実との関係がきちんととらえられていて、その関係を表すためにはどのくっつきを使うのが適しているのかというのが問題になります。言語認識とくっつきの知識がないと、正しい文を書くことはできません。ところが、言語認識も確かではなく、くっつきの知識も経験的なものでしかない1年生にとっては、くっつきを正しくつかうことはやさしいことではないようです。おしゃべりの中では、相手が適当にわかってくれるので、間違いがあっても、大した問題にはなりません。ところが、文字におきかえると、これがなかなか厄介です。完全に正しく使えるようになるためには、これからの意図的な指導が必要となるでしょう。特に、読みの中で、そこにあらわされた現実と対応させることで、くっつきの役割やその豊かさを教えていかなばならないと考えます。

さらに、くっつきには、格助詞以外にとりたてのくっつき「は・も」があります。「は」は、発音と表記のズレのために、それ自体がむずかしいものです。が、さらに、ほかのくっつきについて、とりたてをあらわす場合、子どもたちを苦しめるようです。「ぼくの いえには いぬが います。」のようにとりたてると、この「は」が単独の「は」とは結びつかず、「わ」と書く間違いが増えるように感じます。さらには、単語意識の弱い子にとっては、「には」がくっつきだという意識も薄くなってしまっているようです。これらも、読みの中で、こうやってとりたててことで、ということがわかるか、というような表現性を意識的にとりあげて、子どもたちに意識させ、整理していくことが必要です。もちろん、とりたてて授業をくむことも必要だと思いますが。

以上、子どもたちが表記をまちがえる理由を、自分の主観的な観察にもとづいて列挙してみました。もちろん、かな文字自体を獲得しきれていないという大きな理由もあるのですが、かな文字を獲得したとしてもなおまちがえている現実をしっかりとわかっておきたいと思います。そうでなければ、指導がただの反復練習をやらせることに終始しかねません。これでは、子どもたちにしっかりと現実を認識させる方向にはいかず、技能指導にとどまってしまうように思います。

くっつきの勉強

1学期入門期の段階でのくっつきの学習は、「たんごのおしまいには、くっつきをつけます」というものです。まずは、これがわかっておかないといけないので、文字を獲得する前から、● というようなマークを使うことで、意識化させることから始めました。

しかし、実際には、指摘されればわかるけれど、自由に書くという作業になった

ときには、「は・を・へ」の表記の間違いや、時にはくっつきの脱落といったことまで出てくるようになりました。これも、指摘してやれば、わかります。つまり、知識としてはわかっているのに、第一段階はクリアしているのですが、自分のものにするという段階にはいたっていません。

そこで、くっつきの役割も含めて、さらに意識化させるために、下のような授業をしました。これは、1学期の段階でも示してきたことですが、とりたてて指導するということはできていません。

下の授業は、やはり、基礎的なものです。ただ、1年生では、ここまでわかることができれば、じゅうぶんだらうと思います。さらに体系的な学習を「連語」の学習として、中学年以降でとりくむべきことです。

〔補〕1年生では、を格のくっつきは、主格であらわされたものとは違う対象をあらわすものとしてわかればよいと思います。特に、「はたらきかけを受ける対象」というのがを格であらわされるといった程度のものでいいでしょう。しかし、を格には、豊かな役割があります。

ごはんを こぼす。	校庭を そうじする。
ごはんを 食べる。	校庭を 走る。
ごはんを 思いうかべる。	校庭を 出発する。
ごはんを 炊く。	校庭を かけぬける。

もちろん、を格以外にもこうした内容があるのですが、これらのすべてを1年生という段階の子どもたちに指導するのは意味がないでしょう。それよりも、基本的なことを指導し、言語活動の中で、それぞれのくっつきのはたらきについて取りあげて指導することが効果的だと思います。こうした指導を重ねた上で、「連語」の学習をすれば、実感としても整理して学ぶことができると思います。

授業は、当初、1時間扱いで計画していましたが、実際にやってみると、想定外に時間がかかり、結局、3時間を使いました。子どもたちには、かなり難しい問題もあったりして、知的好奇心も揺すぶられ、楽しんで学習にとりくめました。

めあて くっつきによって、単語がになう文の部分が決まることを知る。
くっつきが変わると、文があらわす現実が変わることを知る。

実際の授業

復習の時間：文の終わりに「。」をつけること、分かち書きにすること、くっつきをたしかめること（教科書教材を使った）
練習ドリルで、正しい表記を選ぶという問題～1時間

*子どもたちの中には、自分は全部わかっている、と自信満々の子がいる。今の自分は、どれくらいわかっているのかを知るためにも、まずは、課題にとりくませた。また、教科書教材も利用できる場所はしっかりと利用してみようというつもりもあ

って、あえて、教科書教材を使ってみた。

ここでは、教科書教材としてのねらいである「。」をつけることは、容易にできた。問題は、その次だ。まずは、くっつきを見つけて、印をつける。「を」「が」は、簡単に見つけられることができた。ところが、くっつき「の」を意識していない子が多く、短い文であるにもかかわらず、くっつきを全部見つけられた子はいなかった。また、「はなしたら」の「たら」に印をつけた子もいた。名詞と動詞が混乱している状態が見られた。さらに、分かち書きでは、名詞部分は、「の」以外はできた。



が、ここでも、動詞部分はむずかしかった。こういうことを考えても、子どもたちがふだん書く作文や日記などでは、分かち書きを強く要求しないことが賢明だろうと思えた。ただ、語彙が豊富だったり、言語生活が豊かだろうと思える子は、「きいてくれました」まで「きいて くれました」と分かち書きをしていた。やはり、かなりの個人差がみられた。

ここでは、くっつきには、「が・を・に・へ・で・と・から・まで・の」「は・も」があることを、再度、おさえた。

同様に、プリントでおこなった練習では、長音表記についてもふれてあり、さらに表記がきちんと身につけていないことが明らかになった。特に、書くのも苦手、しゃべるのも苦手、家でもあまりしゃべらない子に、間違いが多くみられた。言語生活環境が子どもたちの言語に大きく影響していることを感じた。そして、教室の前に掲示している長音表記の例外図について、再度確認をした。

こうした状態であることは、ほぼ予想されたことだった。が、それだけに、気長に指導を続けなくてはならないことを感じた。

くっつきの勉強～3時間

くっつきを意識して文を作る(教科書教材)

が。(動詞述語文)

は。(形容詞述語文)

文の「主人公」は何かを確かめる

「～が」「～は」がその文で伝えたいものをあらわすことを知る。

*この定義は、子どもたちには受け入れられやすかった。

形容詞述語文を、ここで出す必要はない。

ここでは、これまででもくりかえし子どもたちに教えてきたこと、「～が」「～は」で提示されたモノがこの文の「主人公」であること、つまり、何について言いたいかをさしだしているものであることをおさえた(さしだし)。そして、述語部分が、それがどうした、どうだということをおさえている部分だということをおさえた。述語部分はさておいても(くっつきの勉強だったので)主語の部分については、この説明で、子どもたちには理解することができた。

ただ、形容詞述語の文は、子どもたちにはむずかしかったようだ。それは、一つには、の格が所有をあらわすために、1年生の頭の中では、別々のモノとして分けにくいということがあるのかもしれないと思う。また、二つめには、例示されている絵では、「つるは 足が ほそい。」とあらわすこともできるわけで、の格を意識することができにくいということがあったのかもしれない。ただ、「は」を意識させるためには、形容詞述語文・名詞述語文が必要となることは必然なのだけれど。この違いを1年生の子どもたちに教えるのは混乱をもたらすと判断したので、そのことにはふれないまま進めた。



を格・の格のある文を作る(教科書教材)

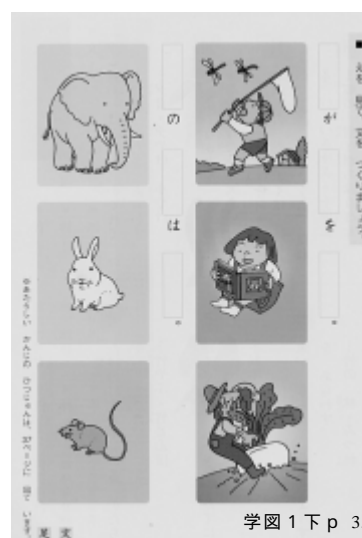
がを。(動詞述語文)

のは。(形容詞述語文)

を格のある文があらわす絵には、「主人公」以外のモノ(相手)があることを確かめる。

の格のあらわすものは、そのあとの単語があらわすものの持ち主であることを確かめる。

*を格があらわすものについては、子どもたちにはわかりやすい。絵によって、必ずそこには、二つ以上のモノがあることがわかる。ただ、実際の授業の中では、最初の文を見て、「とんぼが そらを とんでいる。」という文を作った子がいた。なるほど、これはすごいと思ったのだが、「そらを」の「を」をわからせるのはむずかしいと感じ、この文を作った子を「すごい」とほめるにとどめた。言語生活



豊かな子は、こうした文も作ることができるが、そうでない子は、この絵から文を作ることさえ容易ではなかった。そうした実態の中では、形容詞述語文はわかりにくかった。「もちぬし+モノ」がなかなか分離できないように感じた。特に、この絵の場合は、一体化されたモノ（主格であらわされるモノ以外のモノではない）の特徴だから、子どもによってはかなりむずかしかったようだ。どういう文にしているのか、かなり戸惑っていた。大人の感覚と子どもの感覚の違いをつきつけられたような感じがした。

単語をバラバラにおいて、くっつきがなければ現実をあらわせないこと、くっつきを正しくつけないと、現実を正しく表せないことを知る。

先生がすることを見て、文を作る。～を格のつくできごとを実際に見る。

かみ せんせい おる

はさみ せんせい かみ きる

はな つくえ せんせい まどぎわ うえ はこぶ

* については、容易に文を作ることができた。目の前で先生がやることをそのまま文にするわけだから、視覚的にも具体的でわかりやすかった。特に、「せんせいが」のほかに、では、「かみ」があること。「かみを」は、「せんせいが」「おる」というごきをする相手（対象）であること、では、それに加えて「はさみ」があって、「せんせい」意外に2つのモノがあること、「はさみで」は「かみを きる」どうぐであることを子どもから引き出すことができた。くっつきの役割の違いを、ごくごく初歩的なモノではあるが、子どもたちは感じることもできたと思う。

また、ここでは、くっつけを付け替えることによって、文がなり立たなくなることや、くっつきが正しくつていれば、語順を変えても文がなり立つことを知った。

×かみが せんせいを おる。

かみを せんせいが おる。

こういうことを示すことで、くっつきの大切さも知らせることができた。実際、子どもたちの文では、自分のいいたいことを一番最初に持ってくる傾向が強いため、主語が先にこない場合がよく見られる。語順の問題だが、くっつきを正しくつていれば、それでいいのだということを教えた。

も、実際にやってみせたが、文にすることはむずかしかった。に比べて、登場するモノが多いからだろう。かなり考えていたが、すぐに文が作れた子はいなかった。それぞれにつくくっつきをバラバラに提示することでわかる子もいた。また、「まどぎわ」という意味がわからない子がいたので、説明をしたが、そうした子は、くっつきを提示しても、なかなか文が作れなかった。ここでも、語彙をどれくらい獲得しているかが、現実を文に置きかえる力に影響をしていると感じた。

くっつきが変わると、文があらわす現実が変わることを知る。

単語をバラバラにおき、文を作る。くっつきを入れ替えると、絵がどうなるかを考える。

さかな とり たべる

ゆうじくん まゆさん おいかける

* では、子どもたちは、「とりが さかなを たべる。」という文を作った。これは、実際には見たことがないが、テレビなどで見たことがあるという。では、その逆、「さかなが とりを たべる。」になるとどうか、とたずねると、さかながものすごく大きくて、鳥をのみこむ絵がうかんできたようだった。ちょっと、こわい絵だ。また、は、実際にやってみさせた。ゆうじくんとまゆさんに立ってもらい、「ゆうじくんが まゆさんを おいかける。」と「ゆうじくんに まゆさんが おいかける。」をやってもらった。これは、端的に、立場が入れ替わることがわかった。つまり、くっつきが変わることによって、現実が変わることを実感することができた。

まとめ

正しい文にするためには、くっつきを正しくつかわないといけません。

くっつきがかわると、えがかわります。

れんしゅう

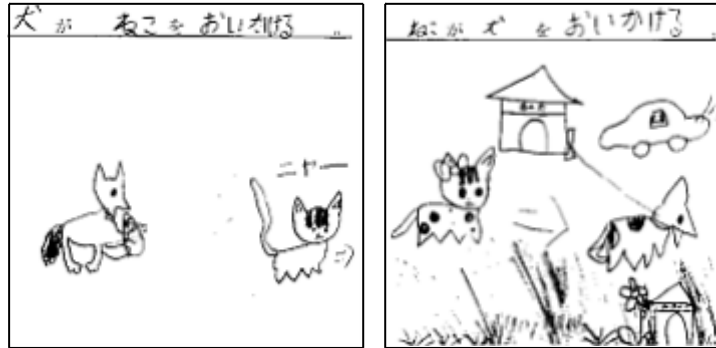
ノート わたし おかあさん ジャスコ かってくれた

ともだち がっこう いえ ぼく かえった

*ここまで学習してきた流れの中では、この練習はむずかしいものだ。ただ、しっかりとくっつきを考えて、どういうできごとがえがけるかを考えてほしいと思った。特に、は、ふだん書く日記の中などで、「わたしは ジャスコで おかあさんが ノートを かって くれた。」というような主述がねじれた文を書くことが多いので、わざとに、出してみた。子どもたちは、かなり苦戦していたようだが、どうい絵が頭に浮かぶか、どういうできごとになるのかをしっかりと考えるようにはげました。そうした中で、では、「おかあさんが ジャスコで わたしの ノートを かってくれた。」という文を書く子もいて、なるほどと思わされた。また、では、「と」のくっつきがなかなか思いうかばないようだった。もちろん、ほかの文もできるのだが。

こうした練習は、パズルのようでなかなかおもしろいと思った。どの学年でも、ひとひねりを入れながら提示することができるかもしれない。

「いぬ ねこ おいかける」の単語を使って、2種類の文を作り、絵を描く。
 これは、すでにやった学習でもあるので、簡単にできた。ただ、実際に絵にかくことで、絵の中身が変わることをしっかりと確認してほしいと思った。



補：授業の中では、何も書いていない短冊形のカードを使った。そうすることで、容易に単語の順番の入れ替えやくっつきに入れ替えができ、ちょっとした違いが大きな違いになることが、子どもたちにも端的に理解することができたように思う。

今の時代なら、パソコンで、画像とともにこうした単語をバラバラにしたような文作りが手軽に行えるようなモノもできるだろう。そうした、視覚的にもわかりやすく、子どもが理解するのに効果的な教材・教具の開発も必要だと思うが、ぼくにはそうした力がないのが残念だ。

やってみてわかったこと、思ったこと

- ・ 1年生でも、くっつきの大切さを理解することはできるし、初歩的な文では、くっつきの役割を理解することができる。
- ・ 入りくんだできごとをあらわす文では、適切な文を作ることが困難である子がいる。つまり、適切にくっつきを使って文を作ることがむずかしい段階であるかもしれない。それだけに、くっつきの役割を意識させながら、作文・読みも進めていく必要がある。
- ・ この学習は、「は・を・へ」という特別な書き方をするくっつきを正しく書けるようにするための学習にはなっていない。しかし、くっつきを正しくとらえることによって、くっつきを正しく表記することができるようになると思う。正しく表記する力をつけさせる指導は、しつづけ・精神的指導でなされるべきではないだろうと考える。

おわりに

ほんのささやかな実践です。また、1年生の担任の先生からすれば、とりたてて目新しい授業ではないでしょう。それだけに、子どもたちにとっても、ささやかなものでしかないかもしれません。もちろん、ぼく自身、この授業をしたから、子どもたちが正確にくっつきが書けるようになるなどは考えてはいません。ただ、ささやかでも、こうした授業をどの学年でも積みかさねることによって、くっつきについて敏感になってほしいと思うし、「田んぼの上をとんぼが飛んでいる。」と「田んぼの上でとんぼが飛んでいる。」の違いや、「遠く向こうには、おしるの屋根がわらが光っています。」の表現性などにひっかかってほしいと思います。

いずれにしても、子どもひとり一人の実態、成長段階が違う中では、全員を同率にわからせることはむずかしいものです。性急に、そうなることを求めるよりも、長い目で、じっくりと身につくようにしてやるのがぼく達の役割なのかもしれません。



学図1下p 60 ~ 61

3学期教材に上のようなものがあります。問題に答えることは簡単です。では、「トンネルから」と「トンネルを」、「のはらで」と「のはらを」は、どちらがうのですか、と問われたらどうしましょう？左ページ、「やぎが います。」は「が」なのに、「雨は ふっていません。」は「は」になるのはどうしてですか、と問われたらどうしましょう（これって、ちょっと高級？）。これがくっつきです。